

東海中学校伊藤祐弼第4代校長とその時代

高木茂樹

1 はじめに

筆者は、「東海の校歌はどのようにしてつくられたか」（『東海高等学校・東海中学校研究紀要』第14集、2019年）で、伊藤祐弼校長が主導した校歌制定の過程を追った。椎尾辨匡名誉校長の建学の理念や思いを校歌に込めようとした伊藤校長が、前任校の愛知県立第一中学校で同僚であった石田元季に歌詞を依頼、石田の師にあたる上田萬年の校閲を経て、弘田龍太郎により曲が付けられた。校歌の公表は、1922年3月1日発行の会報『東海』（第10号の4）でなされた。

拙論では、作詞者の石田元季を校歌制定のキーパーソンと見立てた。それは、石田が上田萬年を校歌制定に招き入れる役割を果たしたのではないかと考えたからである。上田は、標準語や仮名遣いの統一化に尽力した国語学の重鎮であるばかりか、文部省著作の「尋常小学唱歌」の歌詞校閲担当者の一人として音楽教育の面でも大きな影響力を持っていた。上田の校閲を経て東京音楽学校で曲が付されたのなら、校歌は文部省唱歌と同じ制作過程を踏むことになり、格調の高さを付加できる。こうした背景から、上田が何らかの形で校歌の作曲者の選定にも関わったのではないかと推論したのである。

改めて会報『東海』を見てみると、1920年12月（第10号の4）発行の誌面に、上田萬年より学校へ荷田春満の肖像の複写の寄贈を受けたとの写真記事があった。校長就任間もない伊藤校長が上田と接点をもっていたことをうかがわせるものだ。

また、須田珠生の先行研究¹を参照して、東京藝術大学図書館の史料を調べてみることにした。『東京音楽学校作曲委託関係書類』の中に、1921（大正10）年11月30日付で、伊藤祐弼校長からの依頼記録が残されていた。「成ルベク十二月申弘田助教授作曲 十一年二月廿八日送付」とあり、校歌公表の1922年3月1日と適合する内容だった。

校歌の歌詞は確認できたが、当該史料に東海中学校や伊藤校長からの書状は存在しなかった。書類はあくまで受託した東京音楽学校の記録だった。どのような経緯で東京音楽学校に校歌の作曲依頼がなされ、どうして弘田龍太郎が担当することになったのか、上田萬年はどのような関わりをもっていたかなど、推論を裏付ける史料を見つけることはできなかった。しかし、上田による校閲を経た歌詞が添えられ、東京音楽大学に正式に作曲依頼がなされた事実は確認できた。東海の校歌は文部省唱歌とほぼ同じ制作過程を踏んだようだ。

本論では、校歌制定にとどまらない伊藤祐弼校長の事績とその時代の学園の動静を、会報『東海』をもとにして、追っていくこととしたい。

2 伊藤祐弼校長の人となり

伊藤祐弼校長は、1879（明治12）年に愛知県中島郡明治村（現：稲沢市）で鶴飼勇助・ゆう子夫妻の三男として誕生した。六歳で生家を離れ、三重県飯高郡柿野村（現：松阪市）の宝泉寺住職で母の従兄にあたる立禅師の弟子となった。1892（明治25）年、東海中学校の前身である浄土宗学愛知支校に入学、浄土宗学本校、京華中学校、第七高等学校造士館を経て東京帝国大学を卒業した宗門の英才だった。大学卒業後、名古屋出身で医師の伊藤照子と結婚している。大学院で心理学を研究する傍ら、宗門校の東京淑徳高等女学校で教鞭をとり、教頭も務めた。1912（大正元）年、下関で親族が興したトロール漁業に身を投じてしばらく実業界にあったが、1917年愛知県立第一中学校教諭となり、教育界に復帰する。

マラソン校長として知られた日比野寛校長退任後の体制一新の中で、愛知一中を1920年7月退職し、東海中学校へ校長として迎えられている。1925年8月まで在任期間は5年で、退任時には生徒による留任運動が起きるほど信望厚い人物であった。その後、名古屋高等商業学校教授に転じ、病を得て1936（昭和11）年に亡くなるまでその職にあった²。

愛知一中や東海中学校では、生徒の心の鎮静をはかるため黙想（meditation）の意義を熱く語り、授業のはじめ5分ほど黙想してから内容に入ることを終始実行していた。こうした経緯から両校では親しみを込めて「メヂ」と呼ばれていたようである³。

東海中学校で伊藤校長は修身の授業を担当する一方、「夜分、気軽に生徒係の先生の労を謝して自らその応援に出るは固より、殆んど暇さへあれば、東海中学附近其の他のカフェー、喫茶店、玉撞場、映画館等を軒並に見廻つては、生徒教護に当たる」⁴ など、生徒指導にも積極的だった。

生徒に対しては、当初は厳格主義で臨んだが、2年目には生徒自らを活動させて「ああしてはいけない。こうすればよいのか」など反省の機会を与え、自発的に自己の人格に訴えて人格を尊重させ、形成させる人格主義の方針に転回したとされる。そのために、生徒の自主性は高まったが、甘やかしすぎたとの反省点も感じていたようだ⁵。

教職員に対しては、自らの学校経営の方針を会議などで示し、浸透させようとした。原稿には「授業ニ就テ」「教室担任トシテ」「生徒監トシテ」という大項目があり、さらに箇条書きで多くの指針が示されている。例えば、授業についての指針には、「一、本校生徒ハ概シテ予習復習ヲ粗カニスル傾キアルヤニ察セラル、故ニ時々宿題等ヲ與ヘラレ且ツ結果ヲ吟味シテ成績ノ良否ヲ公表シ勉学奨励ノ法ヲ講ゼラル、コト」、「一、授業中時トシテハ他ノ教科書類ヲ開キ居ルモノアリカ、ル不都合ノ者ハ直ニ退場セシメテ生徒監又ハ校長室迄ツカハサル、コト」、「一、始業時終業時ハ厳守ノコト」⁶ など、微に入り細にわたる内容も含まれている。

保護者に対しては、入学式の席上で毎年ほぼ同じ内容の話をしている。まず、子弟教育について4項目を示す。

其一は

自己の子弟を正當に判断し理解して、苟くも買ひ被る如きことあるべからざること

其二は

父兄の親切は飽くまで合理的で又徹底的のものであるべきこと

其三は

父兄は常に子弟の一挙一動に注意し苟くもせざることの念を終始子弟の心中より消失せしめざる様に仕向くること

其四は

学校を信頼し学校の教育方針を尊重することは本より当然のことなれども学校教育を過信せず常に学校と協力して指導監督の任を分担することを心掛くこと

そして、通学日誌にある「生徒心得」、「父兄保護人心得」をしっかりと確認することを求める。なかでも、日々の登校に際しては、服装、忘れ物、弁当の持参、遅刻・早退がないようになどの個別具体的に注意点を述べている。また、家庭に対しては、欠席・遅刻・早退などの連絡は早めに行き届く所で予習復習をさせてください、「時々服や用具教科書の有無並に取扱ひに就て検査してください」などの要望を示している。さらに、タバコ・アルコールの禁止や飲食店・球突場・劇場などへの出入り禁止、門限の設定などについても言及している⁷。自ら夜間の街頭に出向き、生徒指導に当たった校長だけあって、生徒監を兼務しているような言説でもある。学校教育の限界も十分認識しつつ、家庭との協力関係を構築して日々の教育に当たろうとする姿勢が垣間見える。

建中寺には今も「伊藤祐弼先生頌徳ノ碑」が立っている。「先生資性磊落事ニ当リテ周密人ニ接スルヤ寛己ヲ持スルコト厳常ニ私心ヲ減シテ公ニ奉シ克ク信義ヲ重ス威容僧風ニ倣ハスト雖モ内仏心ヲ湛ヘテ道業ヲ修メ広濟衆生ノ念願ヲ持シテ社会教化に昂ム其ノ子弟教育ニ当リテハ温情慈父ノ如ク薰陶ヲ蒙リシ者幾千齊シク其ノ徳風ヲ欽慕ス」と、その人柄を詳しく伝える。熱心かつ細やか、慈愛に満ちた教育姿勢が碑文には刻まれている。

3 伊藤校長時代の新機軸

伊藤祐弼校長は就任に際し、「本校の名声は其校名が自ら指す如く、真に東海より朝日の昇るが如き勢いを以て世間にたかまりつつある」⁸との訓話を残している。校歌の冒頭「朝日ただ射す東海の」を想起させる。椎尾先生の建学の理念を校歌に託すだけでなく、学園を発展させるためにさまざまな学校改革にも着手する。

(1) 会報『東海』の月刊化

伊藤校長の就任と同時に、会報『東海』は年1回の発行から、毎月発行に移行し

ている。これは伊藤校長の方針を反映したものと思われる。毎月発行となった最初の号に、発行回数を増加させた目的が4点示されている。

- 第一、学校と家庭との連絡をして一層適切ならしめんが為め
- 第二、生徒の成績を発表して修学奨励の一助たらしめんが為め
- 第三、全校生徒の「読物」とする為め
- 第四、学校と卒業生並に卒業生相互間の連絡和親を計る為め⁹

当時の情報伝達手段を考えれば、学校の定期刊行物は今日とは比べものにならないほど重要であったと思われる。会報『東海』の内容は多岐にわたり、校長の式辞や各種講演の記録、行事の記録や予定、生徒の作文や作品の紹介、上級学校の受験情報、家庭への連絡事項、卒業生の動静など、現在の校報と同窓会報の性格を併せ持つような刊行物だった。

学期ごとの成績の誌面公表は、今日的な視点から見れば問題点もあろうが、成績優秀者の氏名掲示という形で最近まで継承されていた。「修学奨励の一助たらしめんが為め」という伊藤校長の強いリーダーシップで始まった成績の誌面公表は、1925年1学期まで続いた。1925年8月の伊藤校長退任以後、成績の誌面掲載はなくなっている¹⁰。

また、新入生による「選抜試験に合格して」という作文の優秀作品が掲載されている¹¹。これは、東海中学校校報の恒例の「入学のよろこび」の端緒に当たるものだろう。その起源を100年前に遡ることができるのである。

(2) 教職員人事の刷新

就任早々、伊藤校長は教員の入れ替えという荒療治に着手している。優秀な教員の配置は、一般中学となって間もない東海中学校にとって地位向上の必要な手立てであった。以下の就任者と離任者の一覧によれば、半年余りで就任10名、離任7名と、相当数が入れ替わっている。

なかでも、伊藤校長の前任校である愛知県立第一中学校より3名が就任していることは目を引く。会報『東海』の「職員動静」には記載がないが、他の文献では、「高橋氏は文学士として夙に令名高く、服部氏は『英語の服部』と謂はれ、草

野氏は数学教授の天才として謡はれた人達であつて、一中の三羽烏ともいふべき人が轡を揃へて、公立の一中から私立の東海へ祐弼の招聘に応じて転校」¹² したとある。引用文中の高橋氏とは、会報『東海』の他の記事でも在職が確認できる英語科の高橋斯文教諭で、伊藤校長就任の前年 1919 年 9 月には転入済みある¹³。

就任者一覧

会報号	年月	就任者(担当教科)	前歴
第10号の1	1920年 9月	山村乾十郎(数学科)	名古屋幼年学校
		荒谷顕光(英語・修身科)	「東都在在りて永らく御研学中なりし…」
		草野堅蔵(数学科)	県立第一中学校教頭
		寺島敏次郎(体操科)	県立第一中学校
		服部綾太郎(英語科)	県立第一中学校
第10号の2	1920年10月	鈴木充治(化学科)	名古屋高等工業学校卒業後京都地方に勤務
		フランク・ホフド・コックス(英語科会話書取)	名古屋高等工業学校在職
第10号の3	1920年11月	原田忠謙(英語科)	宮崎県立宮崎中学校(東海から転出し再任)
第11号の1	1921年 1月	三橋六次郎(国語科)	鹿児島県立第一中学校
第11号の2	1921年 2月	高橋謙治(物理・数学科)	「京都理科大学にあり志田博士御指導の下に御研学…」
第12号の5	1922年 5月	平光季治(国語漢文科)	大垣中学
		棚橋兼次郎(国語漢文科)	明倫中学
		増野立三郎(図書科)	幼年学校と兼任
		富所藤作(体操科)	幼年学校
		村瀬亮音(国語漢文科)	宗教大学教育学部卒
		ポール・ゼ・グッドヴェキン(英語科)	ハーヴァード大学 MA

離任者一覧

会報号	年月	離任者	転出先など
第10号の1	1920年 9月	飯田亮	川越中学
		尾鍋秀雄	一身上の都合
第10号の2	1920年10月	中村三元	尾張中学
		早川善吉	曹洞宗第三中学林
第10号の3	1920年11月	村山成美	鹿児島県立第一中学校
第11号の1	1921年 1月	望月代次郎	三重県立第二中学校
第11号の2	1921年 2月	山田兵吉	尾張中学
第12号の5	1922年 5月	豊嶋松治	女子師範
		加納恒三郎	鉄道教習所

伊藤校長の就任に前後して、愛知一中から一年余りのうちに、伊藤校長を加えて5名の教員が大挙して転じたほか、各地の名門中学校からも多くの教員が引き抜かれて来ているようだ。

(3)「学術競争試験」の開始

伊藤校長は学校行事の新設にも着手した。その第一弾が就任まもない1学期終業式に発表された。期末試験を終えたばかりの生徒に語りかける。

自分は学生時代に於ケル前々校長椎尾博士の逸事を想起せざるを得ない。今日のやうに試験の終つた場合には大概の者は教科書もノートもソチノケにして一向に見向きもせないのが通例であるのに、博士は試験が終ると引き続き更に一回教科書とノートの整頓を怠らなかつたのである。自分はこの事実を見受けて度々感心した一人であるが、復習も此所まで心掛けられて初めて徹底的であり、その勉強も所謂試験勉強ではなくして真に実力養成の勉強となり得ると思ふ。而して暑中休暇は正しく此機会を我等に与ふるものであらばねならぬ。

学校にては右様の意味により、生徒一同が第一学期中に於て学習したる部分を今日より引き続き復習せんことを熱望する。(中略)学校は一同が学校の希望に対して如何に忠実でありしかを吟味し且つ其努力に対する結果を表彰して永く記念せむか為めに第二学期の初めに於て先づ英語、国語漢文、数学に就て学術競争試験を行ひ、成績優秀者に対して賞状を授与することに定む¹⁴。

新設された「学術競争試験」は、主に夏期休暇の怠業対策のために考え出されたものだった。そして試験は1920年9月に実施された。10月に成績が公表され、各教科50名の成績優秀者に対して賞状が授与された。各教科の受験者数と成績は以下のようだった。

英語：638名、60点以上275名、40点以上114名、40点未満236名、0点13名

国漢：645名、60点以上300名、40点以上245名、40点未満100名

数学：641名、60点以上261名、40点以上150名、40点未満152名、0点78名

校長は、手厳しく講評を述べる。「東海七百の健児中の多数は、この休暇を如何程までに有効に使用したか、実力養成の為に如何程まで努力したか、誠に疑はざるを得ませむ。殊に上級になるに従ひ其成績の不良になれるは一層遺憾とせざるを得ない」と嘆き、「其結果から考へますれば本校の目的希望に副はざること甚だ遠い」¹⁵ と断じている。第1回学術競争試験は、校長の願い虚しくあまり芳しい成果は得られなかったようだ。

次年度の学術競争試験は、1921年5月から6月にかけて第2回（国語漢文、英語、数学、地理歴史、物理化学博物）¹⁶ が、9月には第3回（国語漢文、英語、数学）¹⁷ が実施された。

1922年には、6月実施の試験が3年生以下は「臨時試験」、4・5年生は「高等専門学校模擬試験」（英語、数学、国語漢文、物理化学）¹⁸、9月実施の試験が3年生以下は「学術競争試験」、4年生は「高等学校入学模擬試験」、5年生は「高等専門学校入学模擬試験」（英語、数学、国語漢文、物理化学）¹⁹ と称して実施された。

その後、学術競争試験として始まった試験は、幾度かの名称変更を経て1929年には、3年生以下は「実力考査」、4・5年生は「模擬試験」と呼称されるようになった²⁰。現在の高1・2の実力考査、高3の模擬試験の源流である。「学術競争試験」は、夏期休暇中の生徒の怠業を何とかしたいという伊藤校長の思いによるものであったが、問題作成にあたる教職員の資質向上をも目指したものではなからうか。

(4) 冬休みの課題

伊藤校長が発した第二弾は、前回と同様に長期休暇の直前に明らかにされた。二学期末試験を終え、冬休みを迎えようとする生徒に語りかける。

冬期休業を有効に使用する一助として又此期間を趣味あらしむる一手段として学校は汝等の努力と熱誠とに依り作成せられたる成績品を来る新学期の初めに学校に差出すことを要求する。其成績品は本より何物でも差支ない。唯其物が汝等の勤勉と誠実との結晶であれば宜い²¹。

伊藤校長の呼び掛けに応じて、休業明けにさまざまな「成績品」が提出された。書、絵画、和歌、日記、手工品、写真などの他、高学年になると英語単語研究、

幾何練習など上級学校への受験準備に直結した提出物もあった。

これらの作品は、1921年2月に「成績品展覧会」として公開された。伊藤校長は開会の挨拶で、「一向にツマラヌ成績品ばかりで御覧に供する程のものでは」ないとしながらも、これまでの世の中で行われてきた展覧会は結果重視の傾向から「生徒の製作品を全部其儘に展覧することよりも優秀なるもの、一部に止め」ることが多いと批判する。

そのような展覧会では「其一部（筆者注：成績優秀者）の競技会と云ふ様なものになり、多数の成績不良の者は展覧会の為めに折角骨折つて製作物を出しても一向に其の努力と自己の得意とを他人に認められぬことになり」、自暴自棄に陥ってしまう。「全校生徒に向つて優秀なる製作物を要求することは不可能」でも、「一生懸命になつてヤツて来いと云ふことは学校が一樣に平等に強ゆる」ことができるものだとする。こうした考えから「其結果の製作物よりも先づ其過程に注意を払」って企図された展覧会であるので、「其製作品の優劣を問はず生徒が差出しました物は何一つでも陳列して其努力を認めてやるに留意致し、又其努力を愈力あるものたらしむるが為めには一定の課題は致さず生徒の自由選択」²²としたと述べている。

2日間にわたる展覧会の記録を見ると、2月12日は「今日は特別に御招待申したる来賓の方々のみには御覧を願ふ筈なりしも、臨時筒井、古新両小学校より五六年生の来観ありて午後は格別賑かなりき」とあり、市内の学校関係者以外にも近隣の小学生も招いたようだ。2月13日は「準備未だ完からざる午後八時半より来観者あり。閉会の午後三時に至るも来観者其跡を絶たず。全四時漸く物理の実験を打ち切りて会を閉づ」とあり、大変盛況であったようだ。両日とも約50～60名の生徒が当番として来場者の対応にあたった。

当日の様子は、生徒の手記からもうかがい知れる。「東海健児の心ばへ、物の見方、考へ方、又は手さきの技巧に到るまで、赤裸々に発表せられたのが此の展覧会であります。それ故、私達の出品からは、無邪気さと元氣と、清純なる青年の心持を鑑賞して戴く事が出来るであります。その上、学校備へ附けの各種器械なども陳列公開せられましたから、学校のあらゆる方面の、形あるもの、形なきものの発表とも言ひ得るであります。二月十二日は市内関係学校の諸先生方に

見ていただき、二月十三日は私達生徒や父兄の方々、一般公衆の方に見ていただきました」とあり、活気あふれる様子がわかる。

展覧会は、校内の内覧も兼ねており、第1号室：化学実験室 → 第2号室：洋画 → 第3号室：手工品と休憩室 → 第4・5号室：書・文章・詩・歌・俳句 → 第6号室：地理歴史室 → 長廊下：学校の現況案内の写真や図表 → 第7・8・9・10号室：絵画（図書室） → 第11号室：物理実験室 → 第12・13号室：物理器械陳列室 → 第14号室：写真・絵葉書・切手 → 第15室：博物標本室、というルート設定がなされていた。

当番を務めた生徒は、「最先に押しかけて来て下さったのは小学校の生徒諸君でありました。此の無邪気なる珍客諸君を、玄関に立つて莞爾として出迎へ、室から室へと案内をして廻るのは此の上もない愉快であります」²³と感想を述べている。

冬期休業の自由課題という宿題は、展覧会という名の学校公開へと昇華した。嬉々として案内を買って出る東海生の様子は、今のサタデープログラムや記念祭の光景と変わらない。入学年齢間近の小学生は、さしずめオープンスクールにやってくる未来の東海生の姿のようでもある。

(5) 夏期講習会の開始

伊藤校長の発した学校改革の第三弾は、進学に対するサポートである。第1回の夏期講習会が4・5年生を対象に、1921年8月5日から25日まで3週間開催され、80名ほどが受講した。各週の開講教科と担当者は以下の通りである。

第1週：数学（代数）坪井教諭、英語（訳読）原田教諭、国語天野教諭、漢文佐藤教諭

第2週：数学（代数幾何）大橋高工教授、英語（文作）服部教諭、国語三橋教諭、漢文佐藤教諭

第3週：数学（幾何）椎尾八高教授、国漢石田医大予科教授、英語高橋教諭²⁴

第2回は開講教科や担当者は詳らかではないが、1922年8月6日から26日まで開講された。卒業生にも参加呼びかけを行い、164名が受講した²⁵。

第3回は、1923年8月6日から26日まで、4・5年生と卒業生あわせて137名が受講した。開講教科と担当者は以下の通りである。

数学／坪井教諭、大橋高工教授、中野医大教授 漢文／坂井八高教授

国語／石田医大教授 英語／源馬高商教授、原田教諭、服部教諭²⁶

講座担当者は学内の教員だけでなく、進学先ともなる高等教育機関の教授を多数招いている。椎尾八高教授は椎尾名誉校長の甥・詞（ひとし）、石田医大予科教授は校歌作詞者の石田元季である。入試作成者ともなる高等教育機関の教授から受験指導を受けることは、今日的視点に立てば、入試の公正さが担保できるのかという点で疑問が残るが、生徒の進路を考える上で、教授との接点は有益だったのだろう。伊藤校長は人脈をフル活用して夏期講習会を始めた。

夏期講習会は1927年まで続く。「今夏休中本校内に講習会開催の積なりしも受験準備の講習会市内所々に設けらるゝあり加ふるに今回御大典記念事業の発起せらるゝあり、校務多忙となりたるに付き、本年は講習会を開かぬことにせり」²⁷と、1928年の会報は記している。

4 まとめ

学園の発展において伊藤祐弼校長が果たした役割は大きい。伊藤校長は、椎尾名誉校長が吹き込んだ東海の精神を具現化するのに尽力した。それは校歌制定に止まらなかった。

伊藤校長の在任した1920（大正9）年から1925（大正14）年は、学園経営が軌道に乗り出した時期でもあった。生徒定員は、1921年に800名、1922年に1100名、1924年に1200名と増加している。1922年には北校舎が完成し、定員増に対応した学校施設が整備されている。表に示したように志願状況も好調で、実質倍率も2倍程度で推移している。卒業後の進路もほとんどが上級学校への進学で、新設の中学校としては堅調な滑り出しがなされた。

会報『東海』の月刊化は、学校規模の拡大によって生じる家庭との連絡不足を補う役割を果たした。成績を誌面公表することで修学奨励をねらった。また、卒業生向けの同窓会報を兼ねることで学園の一体感をつくり出した。

多くの優秀な教員を招き入れることにも力を注ぎ、これら教員の手による学術競争試験を始めた。夏期講習会では、上級学校の教授を講師に招聘するなど、進学に対するサポートも怠らなかつた。伊藤校長は校歌制定と同様、人脈をフル活

用して学校改革に尽力した。

生徒に作品を提出させ、展覧会を開く。今のオープンスクールのような催しは、生徒募集向けの広報活動の端緒とも言える。追悼会や水練会など、学園独自の行事はすでに始まっており、一般中学として世間の認知度を上げる必要もあったのではないだろうか。

伊藤校長時代の1922年3月に制定された校歌は、100年の歴史を迎えた。校歌と並行して試みられたさまざまな取り組みは、学校の屋台骨となった。時代による変化はありつつも今も東海中学・高校で生きているのである。

入試状況

年	志願者	受験者	合格者	実質倍率
1909(明治 42)	42		40	
1910(明治 43)	95		83	
1911(明治 44)	90		76	
1912(明治 45)	89		66	
1913(大正 2)	92		73	
1914(大正 3)	138		120	
1915(大正 4)	167		135	
1916(大正 5)	210		156	
1917(大正 6)	439		153	
1918(大正 7)	357		165	
1919(大正 8)	413		160	
1920(大正 9)	650		165	
1921(大正 10)	753		220	
1922(大正 11)	893		268	
1923(大正 12)	1,007	680	267	2.5
1924(大正 13)	828	528	253	2.1
1925(大正 14)	743	512	215	2.4
1926(大正 15)	771	522	265	2.0

出典：1920年までは「東海中学校要覧」会報『東海』第11号の2、1921年2月。以後は会報『東海』各年次による。

- 1 須田珠生「学校校歌作成意図の解明—東京音楽学校への校歌作成依頼状に着目して—」『音楽学教育』第46-1、2017年。
- 2 伊藤祐弍先生頌徳会『伊藤祐弍先生伝』1941年、1~137頁。出生時の姓名は「鶴飼祐一」。成人後、「祐弍」に改名。妻の実家伊藤家との養子縁組にともない「伊藤」に改姓している。
- 3 前掲『伊藤祐弍先生伝』、77~78、289~290頁。
- 4 前掲『伊藤祐弍先生伝』、97頁。
- 5 前掲『伊藤祐弍先生伝』、84~85頁。
- 6 前掲『伊藤祐弍先生伝』、97~103頁。
- 7 会報『東海』第15号の5、1925年5月。
- 8 伊藤祐弍「講堂訓話」会報『東海』第10号の1、1920年9月。
- 9 会報『東海』第10号の1、1920年9月。
- 10 会報『東海』第15号の8、1925年8月。
- 11 会報『東海』第11号の5、1921年5月。
- 12 前掲『伊藤祐弍先生伝』、85~86頁。『東海学園百年史』東海学園、1988年、158~159頁にも同様の記述がある。
- 13 「東海中学校要覧」会報『東海』第11号の2、1921年2月。『東海中学校・高等学校同窓会名簿2018年版』には在職期間が1919（大正9）年9月1日から1937（昭和12）年3月31日までとある。
- 14 会報『東海』第10号の2、1920年10月。
- 15 会報『東海』第10号の2、1920年10月。
- 16 会報『東海』第11号の6、1921年6月。
- 17 会報『東海』第11号の10、1921年8月。
- 18 会報『東海』第12号の7、1922年7月。
- 19 会報『東海』第12号の10、1922年10月。
- 20 会報『東海』第19号の7、1929年7月。
- 21 伊藤祐弍「講堂訓話」会報『東海』第11号の2、1921年2月。
- 22 会報『東海』第11号の3、1921年3月。
- 23 会報『東海』第11号の3、1921年3月。

共生文化研究 第7号

24 会報『東海』第11号の9、1921年9月

25 会報『東海』第12号の9、1922年9月

26 会報『東海』第13号の9、1923年9月

27 会報『東海』第18号の7、1928年7月